

ガクプロへの訪問調査：就活と仲間づくりのコミュニティ

藤野 友紀¹栢真賀 透²田中 敦士³

要 旨

株式会社 Kaien が運営する、発達障害のある学生向けの民間サービス「ガクプロ」を訪問し、観察と聞き取りを行った。ガクプロは就活と仲間づくりを見据えた学外サークルを標榜している。ガクプロの特徴は、(1)大学とは独立した運営組織、(2)学生が利用コースに応じて料金を支払うシステム、(3)個人活動とグループ活動から構成されたプログラム、(4)自分のペースで参加できる自由度、(5)困りごとに寄り添いながら障害認識を深めるサポート、(6)学生本人と保護者に対する個別面談の充実、である。発達障害のある学生に対する本学の修学・就職支援をさらに充実させるために、短期的な課題として、ガクプロのカレッジ講座を参考にした本学版入学前・入学直後プログラムの作成、ガクプロのスタッフを講師として発達障害のある学生の就活サポートの基本を学ぶFD/SD研修会の開催を挙げた。長期的には、札幌圏の大学が協働してガクプロに似た取り組みを開始する必要性と可能性について指摘した。

キーワード：発達障害、修学支援、就職支援、ガクプロ、Kaien

1. はじめに

本学の2019年度学長裁量経費「発達障がいのある学生への教育支援事業」(プロジェクトリーダー：田中敦士)では、発達障害のある学生に対する修学・就職支援において先進的な取り組みをおこなっている道内外の大学や事業所等を訪問し、そのノウハウの蓄積を目指した。

著者たちは、2019年10月28日と29日の両日、株式会社 Kaien が運営する民間サービス「ガクプロ新宿」を訪問調査した。本稿では、ガクプロの概要を紹介し、本学がそこから学ぶべき支援のポイントを整理する。そして本学の支援をさらに充実させるための提案を行う。

2. ガクプロ新宿

2.1 ガクプロとは何か

ガクプロは、株式会社 Kaien が運営する、発達障害のある大学生、発達障害の疑いのある大学生向けの民間サービスである。株式会社 Kaien は2009年の設立以降、発達障害のある子ども向けの放課後等デイサービス、発達障害のある成人向けの就労移行支援事業を展開し、現在は首都圏を中心に全国9箇所(秋葉原、代々木、新宿、市ヶ谷、池袋、横浜、川崎、大阪天六、大阪福島)に直営の事業所がある。ガクプロは同社の放課後等デイサービスを利用している親からの要望により、2013年に開始された。ガクプロ・パンフレットに「仲間づくりや対人関係が苦手な学生のための就活サークル」「“社会”に出るために必要な心構えと職業スキルを楽しみながら学べる工夫が満載」と記載されているとおり、仲間づくりと就活を見据えた学外サークルという位置づけである。現在は首都圏を中心に5箇所(秋葉原、新宿、立川、川崎、大阪)及びオンラインで実施されている(2021年1月現在)。訪問調査を実施した2019年10月時点のガクプロ登録者は230~240名、8割が大学3年生以上、2割が大学1~2年生と

¹ 札幌学院大学 人文学部人間科学科；
fujino@sgu.ac.jp

² 札幌学院大学 人文学部人間科学科；
tochi13@sgu.ac.jp

³ 札幌学院大学 人文学部人間科学科；
atanaka@sgu.ac.jp

のことであった。

著者たちが訪問した「ガクプロ新宿」は、新宿駅から徒歩10分のビルの5階にある。フロアの半分はKaizen新宿の就労移行支援事業所、残りの半分がガクプロ新宿である。隣接する就労移行支援事業所のスタッフの力を集結してガクプロの活動を展開している。ガクプロは民間サービスなので利用料を設定しているが、利用料のみでは経営は成り立たず、Kaizenの放課後等デイサービスや就労移行事業支援所がガクプロの運営を支えている。

2.2 利用開始から就職までの流れ

ガクプロの利用開始から就職までの流れを示したのが図1である。

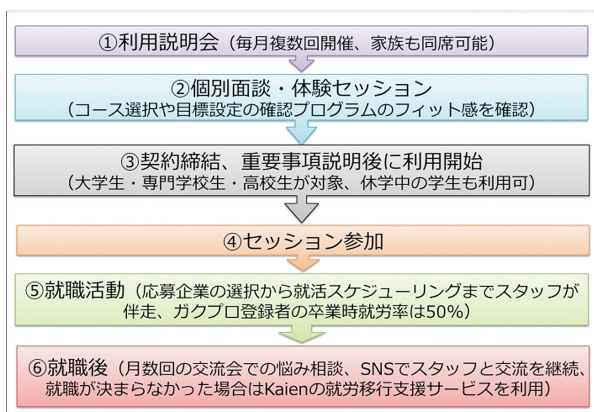


図1 ガクプロ利用開始から就職までの流れ

利用のきっかけは「親がネットで調べた」「大学の相談室からの紹介」「通院先からの紹介」が多い。利用説明会の後、個別面談と体験セッションのお試し期間を経て契約を結ぶ。そこからプログラム・セッションへの参加が始まる。就職活動では応募企業の選択からスケジュールリングまで、利用者一人ひとりにスタッフが伴走する。ガクプロ登録者の大学卒業時の就職率は50%だという。就職後も交流会やSNSでアフターフォローを実施している。卒業時に就職が決まらなかった場合は、隣接する就労移行支援事業所に登録して活動を続ける利用者も多い。

2.3 プログラムの内容

上記図1の「セッション参加」の対象となるプログラムについてまとめたのが表1である。

就活知識の習得や面接練習や職業訓練などの「ワー

表1 プログラム・セッションの内容

平日	ワーク	就活知識の習得、企業選びの相談、面接練習、書類作成、ES添削、よろず相談など
週末	ワーク	上記+職業訓練(PC操作、オンライン店舗など)
	グループ	しゃべり場(苦手なことについての茶話会など) ライフスキル(会話の仕方、アンガーマネジメント) ビジネススキル(優先順位付け、電話、メール) キャリアプランニング(職業人生の心構え) 就職した先輩の経験談を聞く会
カレッジ講座		大学生生活をストレスなく過ごすノウハウを学ぶ (空きコマの過ごし方、サークルやアルバイトの探し方、単位の取り方、友人関係の作り方など) 高校生向けに映像化、遠方在者のオンライン受講可
個別相談		学生生活や就職活動について30分単位の相談 (本人のみ、家族のみ、三者面談も可)

表2 利用料金

コース	金額	内容
プラス (全部受けたい)	18,000	平日日中(週4)・平日夕方(週4)・週末(月4)+個別相談(月1)
標準 (3・4年生推奨)	14,000	平日夕方(週4)・週末(月2)+個別相談(年3)
ライト (1・2年生推奨)	11,000	週末(月2)+個別相談(年3)
平日日中 (大人数が苦手)	14,000	平日日中(週4)+個別相談(月1)

ク」に加えて、週末の「グループセッション」では茶話会、ライフスキル、ビジネススキルの習得、先輩の経験談を聞く機会も用意されている。また、大学生生活をストレスなく過ごすノウハウを学ぶ「カレッジ講座」は、「学外サークル」を標榜するガクプロの特徴をよく表しているといえよう。ガクプロ新宿の場合、平日は数名、土曜日は20名超、日曜日は10名程度の参加人数とのことである。

利用料はプログラム・セッションを組み合わせた4つのコースに合わせて設定されている(表2)。利用者は好きなコースを選んで月額利用料を支払う。

2.4 利用者の家庭の特徴、及び保護者との連携

ガクプロ利用者の家庭は、(1)子どもを大学に進学させている、(2)月額1万円超の利用料を自己負担できる、という条件を満たすことから、情報収集に長けていて、経済的に安定している保護者が多い。それゆえにガクプロ利用時点で我が子の発達障害に対する理解が進んでいる保護者の割合も高いという。表1にもあるように、ガクプロは利用者一人ひとりへの伴走的な関わりと共に個別相談も充実している。本人との面談の他に、希望があれば、保護者のみを対象とした面談、本人と保護者を含む三者面談も実施する。また、登録者の利用状況と様子はスタッフ間の月1回のミーティングでまとめ、4か月に1回、保護者に知らせるシステムである。ガクプロの設立自体が放課後等デイサービス利用の保護者のニーズに基づくものなのであるが、実際の活動も保護者と密に連携を取りながら行われていることがわかる。

2.5 「平日ワーク」のようす

著者たちは訪問調査において「平日夕方ワーク」と「平日日中ワーク」を見学した。フィールドノーツの要点を表3、表4にまとめた。

表3 平日夕方ワークのようす

部屋の真ん中には16～18名分の椅子に囲まれた大きな長机が二つ並んでいる。ノートパソコンを接続できるコンセントが長机に付属している。何時集合、何時開始ということもなく、パラパラと人が集まってくる。完全に個別の活動。互いに挨拶をしたりおしゃべりをしたりすることもなく、部屋内のノートパソコンを持ってきて好きな場所に座る。この日17～19時までの見学で参加者は5名。場所を決めたらホワイトボードに自分の名前とやることを書いて着席する。スタッフが固定席に座って全体の様子を見たり、個々に声かけをしたりする。疲れたのか寝ている学生、独り言が多い学生もいる。穏やかに時間が流れている。

表4 平日日中ワークのようす

2人の学生のうち1人は多機能トイレに関するアンケートを題材にデータリサーチの練習をしていた。ホワイトボードにはエクセルを使った集計方法が書かれている。年輩のスタッフ（一般企業で勤めていてリタイアした雰囲気60歳過ぎの男性）が学生のパソコンをのぞきながら時々アドバイスを与えていた。

日中ワークに参加しているのは「4年生になって単位をほぼ取り終え、大学に行く必要のない学生」「休学や留年で大学に行っていない学生」が多いとのこと。隣室の就労移行支援事業所のプログラムのようなシステムティックな雰囲気やロールプレイの練習はないが、平日夕方ワークに較べるとやや訓練的な要素が加わっているように見えた。

今回は日程の都合上、平日ワークしか見学できなかった。スタッフの説明によると、平日ワークは個人活動が主で、週末のグループ活動では利用者間の会話やコミュニケーションが増えるとのことである。今回の見学では、参加者が皆穏やかに自分のペースで活動し、そこに静かにスタッフが寄り添っているのが印象的だった。週末のグループ活動はまた違った雰囲気なのだろうが、平日ワークの緩やかさは、月額会費を払って自分のペースで通うスポーツジムの連想させるものであった。

3. ガクプロから本学が学べること

3.1 発達障害のある学生の就職支援ニーズ

上記ではガクプロ新宿への訪問調査で得られた概要をまとめた。ここで改めてガクプロの特徴を確認しておく。

まず一つめとして、発達障害のある学生（疑いのある学生を含む）向けの民間サービスであるガクプロは、特定の大学と提携しているわけではなく、完全な学外組織として運営されている。ガクプロの利用に結びつくまでの情報提供や紹介の過程で協力関係を築いている大学もあるが、利用後はあくまでガクプロと学生個人及び保護者との連携が主である。

二つめに、ガクプロは発達障害を殊更に強調することはない。Kaizenのホームページには「ガクプロ：発達障害のある大学生支援プログラム」と銘打っているが、ガクプロのパンフレットには「学生生活や就職活動に課題を感じている学生を対象にしたプログラムです」「他の学生と仲良くするには?」「就職活動は何かから手を付けたら良いの?」「どうやったら単位を上手に取れるの?」「会社ってどんなところ?」「自分の得意・長所が見つからない」そんな大学生や専門学校生の皆さんが利用しています」と、個人の困りごとに照準を合わせたメッセージが並んでいる。

三つめは、何かを強制されずに自分のペースで参加できるプログラムになっていることである。それは平日ワークの個人活動に限った話ではない。受けたいプログラムに合わせてコースを選択し、利用料を負担する。大学の授業が終わったら駅近のガクプロに自ら足を運ぶ。そのスタイル自体が利用者に自分のペースを守ることを保障している。もちろん家庭の経済的負担は無視できないが、習い事のように「お金を払って通う」ことが、利用者本人にとって「自分が選んで通

ている」「利用料に見合うリターンを得よう」という意識につながる面もあるのかもしれない。

著者たちがガクプロのこれらの特徴に注目したのは、学内で発達障害のある学生の就職支援をおこなう難しさを実感していたからである。

本学では2014年度から2018年度まで、アクセシビリティ推進委員会とキャリア支援課主催で「障がいのある学生のための進路セミナー」を年1回開催した。聴覚障害や肢体不自由など、障害者手帳を取得している学生は、すでに学内で修学のための支援を受けており、サポートセンターとの継続的なつながりを持っている。また、身体障害という性質上、障害が他者に明示されやすく、若い頃から障害とのつきあいが長いため、本人も保護者も大学入学前に障害認識を深めている場合が多い。したがって、進路セミナーの対象であることが明確で、案内の声かけもスムーズに進み、参加に対する本人の心理的なハードルは低かった。

しかし、発達障害のある学生は事情が異なる。まず手帳を取得している方が少数である。そして発達障害の診断を受けていても、それを把握しているのは極めて限られた教職員のみで、本人が他者への開示を望んでいない例が大半である。さらに、発達障害があるけれどもこれまで受診経験はなく、障害認識がないままに学修や社会生活に困りごとを抱えている学生も一定数存在する。そのような中で「障がいのある学生のための進路セミナー」への参加を呼びかけてもなかなか申込はなく、障害認識のない学生に対しては案内すること自体が難しいという状況であった。

また、特に発達障害のある学生に対しては、イベント的なセミナーで障害者雇用に対する知識を身につけたり先輩の体験談を聞いたりするだけでなく、(1)障害認識を深める、(2)自分の得意なことや長所を見つける、(3)困りごとを解消する工夫を知る、といった取り組みを大学入学後の早い段階から積み重ねることが必要である。それが自分を肯定し、自分に自信を持つことにつながる。そうした支援の構築は、キャリア支援課やアクセシビリティ推進委員会・サポートセンターといった学内組織の教職員が本来の業務と兼務しながら担えるものではない。発達障害とその支援に関する専門的知識を持った学内外の人達とつながりながら、学生本人にとって利用しやすいリソースを創造し配備していくことが不可欠である。

いま自分が抱える困りごとから出発し、「発達障害」

の категорияの有無にかかわらず自由に参加でき、より良い人生を歩むことをめざして日常的に就活に伴走してくれるスタッフが居る。そのような場こそが、発達障害のある学生の就職支援ニーズに合致しているように思われる。ガクプロは著者たちに一つの具体的な形を提供してくれた。

3.2 今後の取り組みのヒントと展開可能性

では、今回の訪問調査で得られたことを、本学の今後の取り組みにどのように活かせるだろうか。短期的な視点と長期的な視点に分けて提案したい。

まず、短期的に本学ですぐに取り組みることとして二点挙げられる。一つめは、ガクプロのカレッジ講座を参考にして、本学版入学前・入学後プログラムを作成する。「授業と授業の間の過ごし方」「サークルの探し方」「単位を確実に取るための履修登録の方法」など、発達障害のある学生が入学前後につまずきがちな事柄についてガイドするプログラムである。コンテンツ化して入学者全員に配布・配信すれば、自分に発達障害があると認識していない学生に対する事前フォローとしても機能するだろう。

二つめは、ガクプロスタッフを招いて、発達障害のある学生の就活サポートの基本を学ぶFD/SD研修会を開催する。学外の機関と連携するにしても、まずはキャリア支援課の職員をはじめとする本学の教職員が、発達障害のある学生の就職を支援するにあたって理解すべき基本事項、必要とされる支援内容について学ぶことが不可欠である。

次に、長期的に取り組みたいことは、ガクプロのような組織の設立である。ただし、訪問調査で明らかになったように、ガクプロの経営はKaizenの放課後等デイサービス及び就労移行支援事業所の運営実績があって成り立つものである。発達障害のある学生に対する専門的な知識と支援のノウハウを持ったスタッフを確保し、「学外サークル」のように自由に通える場所を用意するのは、本学単独では難しい。また、学生にとっても「学外サークル」という位置づけが望ましいだろう。そこで、本学単独ではなく、札幌圏の複数の大学が提携して協力することが求められるのである。たとえば提携した大学が委託金を負担するのは一つの方法かもしれない。就職先の開拓も、複数の大学をネットワーク化すれば、単独で進めるよりも効率が良く、企業に対するインパクトも大きいだろう。大学間連携の

ベースはすでに存在する。たとえば、2017年に発足した北海道障害学生修学支援ネットワークには、本学を含む札幌圏の12大学が加盟し（2021年1月現在）、半年に一度の情報交換会を継続している。さらに2020年には江別四大学間で、発達障害のある学生向けの社会移行支援プログラムを協働して運営する構想が持ち上がり、検討が続けられている。発達障害のある学生に対する修学支援と就職支援に必要なリソースを創り出すためには、個々の大学の垣根を越えて情報を共有し、専門的なノウハウを持った民間組織とも連携していくことが鍵になるだろう。

4. おわりに

本稿ではガクプロの訪問調査に基づき、ガクプロの概要の紹介と、本学における発達障害のある学生に対する支援をさらに充実させるための提案を行った。ガ

クプロが唯一の理想型というわけではないし、首都圏や大阪と北海道では学生人口も、企業の雇用状況及び障害理解も異なる。しかし、発達障害のある学生の困りごとやニーズは同じであり、それに対応した支援を創出していくためにガクプロの取り組みは大いに参考になるものであった。

参考文献

- [1] 株式会社 Kaien (2014a). Decobo 通信, 第1号.
- [2] 株式会社 Kaien (2014b). Decobo 通信, 第2号.
- [3] 株式会社 Kaien (2015a). Decobo 通信, 第3号.
- [4] 株式会社 Kaien (2015b). Decobo 通信, 第4号.
- [5] 株式会社 Kaien (2015c). Decobo 通信, 第5号.
- [6] 株式会社 Kaien (2017). Decobo 通信, 第6号.
- [7] 株式会社 Kaien (2019). Decobo 通信, 第7号.
- [8] ガクプロ：発達障害のある大学生支援プログラム <https://www.kaien-lab.com/gakupro/univ/> (2021年1月27日閲覧)

A Field Survey of the Gakupro: A Program That Supports Employment and Interactions Among Peers

Yuki FUJINO¹, Toru TOCHIMAKA² and Atsushi TANAKA³

Abstract

This article reports on the results of interviews and observations with the Gakupro, and makes proposals that can be used to improve the support systems of our university. The purpose of the Gakupro is to provide learning and employment support to students with developmental disabilities. The characteristics of the Gakupro are as follows: (1) it is run by the company, (2) students pay for the program, (3) the program consists of individual and group activities, (4) students can participate in the program at their own pace, (5) staff members help students recognize their disabilities while coping with their difficulties, and (6) staff members provide individual support to students and their parents. To enhance our support for students with developmental disabilities, we propose the following actions. First, we should refer to Gakupro's programs to create pre-admission and post-admission programs for students with developmental disabilities. Second, we should plan to invite Gakupro staff members as instructors to hold workshops to teach us how to support students with developmental disabilities. Finally, we discussed the significance of the cooperation of universities in the Sapporo area to start activities similar to Gakupro.

Keywords: Developmental Disabilities, Employment Support, Gakupro, Kaien, Study Support.

¹Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; fujino@sgu.ac.jp.

²Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; tochi13@sgu.ac.jp.

³Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; atanaka@sgu.ac.jp.